

科目名	国際金融論特講	担当者	エンドウ 遠藤 ユキヒコ 幸彦	期間	通期	単位数	4
-----	---------	-----	--------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>今年度は、国際的な経常収支の不均衡（グローバル・インバランス）が国際通貨体制にどのような影響を与えているかという今日の問題への接近を試みる。特にその具体例として過去数年のユーロ危機を素材にする。</p>		
到達目標	<p>前半では、主としてマクロ経済学的な観点からの伝統的な国際金融論の枠組み、すなわち貿易や各国のファンダメンタルズを基礎とする考え方を押さえつつも、近年重要性を高めている資金フローに基づくアプローチを重視する。そのために応用ミクロ経済学ともいえるファイナンス理論にも目を向ける。</p> <p>後半では、それらの枠組みを現下の問題に適用することを試みる。</p> <p>教養として国際金融の知識を蓄積するというよりも、さまざまな問題の分析に応用できるような視角の習得を目指す。</p>		
学修方法	<p>基本、教材の独習が中心になるが、それらをメディアなどで見聞する国際金融問題を考える際の枠組みとして利用して欲しい（マスコミの論調が必ずしも理論的に正しいとは限らない）。その過程で、疑問に思ったことなどはぜひ講師、あるいは他の受講生との対話の場に出して議論してみたい。</p> <p>また、通信制のデメリットを補うため、数回クイズを出す予定。回答する義務は課さないが、通年で負荷がかかる可能性があるため、そのつもりで受講してほしい。</p>		
スケジュール	<p>4つのレポート課題のうち、1つは自分の修士論文とより関連の深い分野（もちろん国際金融論のなかでだが）のレポートで代替することを認める。評価軸は課題と同じとする。そのような場合には、早めに講師に申告し、了解を得ること。他のスケジュール（レポート提出期限など）は、学事暦通りとする。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	100%	① ロジックの整合性を最重視する（「正解」を求めているのではない）：40% ② 論点がカバーされているか：30% ③ リサーチが十分なされているか：30% ④ その他（加点のみ）
	平常評価	0%	討議への貢献などが認められれば、レポートへの加点対象とする。
履修者への要望	<p>理論的な教科書の理解に留まらず、調査機関のリサーチレポートや企業のアニュアルレポートなどにリサーチの範囲を拡大して、実務的な応用を心がけて欲しい。一番重要な点は、請け売りではなく自分の頭で考えること。論文作成の際にも役立つはずである。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 勝悦子 教材名： 『新しい国際金融論』（有斐閣，2011年）ISBN:978-4-64-116333-1）2,900円+税
	今年度は、動揺する国際通貨体制の今後とそのインプリケーションを考える。基本教材1は、その基礎となる教科書である。
参考図書	岩村充『コーポレートファイナンス』（中央経済社，2013年） ISBN:978-4-50-246730-1 2,800円+税 その他定番的なファイナンスの教科書（多分この書籍より大部になるが）で代替してもよい。
履修上のポイント	基本教材1は、きわめてオーソドックスな構成なので、企業行動の観点から考えるには、参考図書や新聞、各種リサーチレポートなどを参照すること。
レポート課題1	2016年6月末の日米の経済状況を踏まえて同年末の米ドルの為替レートの予想をしなさい。 留意点： ①分析に当たって利用したデータを明確に示しなさい。②教材1の枠組みにとらわれる必要はないが、論拠を明確にすること。繰り返すが、結果的に予想が当たればよいということではない。
レポート課題2	トヨタやソニー、キヤノンといったグローバルに活動している日本企業は、為替変動リスクをどのように管理すべきだろうか。企業価値を高めるという観点から基本的な考え方を示しなさい。 留意点： 製造や販売といった企業活動を具体的に想定した上で、どこにどのようなリスクがあるかを注意深く検討すること。彼らが実際にどうやっているかを知るのも有用である（ただし、実際の行動が理論的に正しいとは限らないが）。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 貝塚啓明＋財務省財務総合政策研究所編著 教材名： 『国際的マネーフローの研究』（中央経済社，2012年） ISBN:978-4-50-246490-4 3,800円+税
	ある研究会の記録であるが、直近の状況を豊富な統計図表をもとに解説している。膨大な資金の流れが引き起こす問題を理解する上で、基本教材1を補完する内容である。
参考図書	小川英治編著『グローバル・インバランスと国際通貨体制』（東洋経済新報社，2013年） ISBN:978-4-49-265453-8 2,800円+税 なお、ユーロ危機については適宜、文献、レポート、雑誌記事などで情報を補うこと。
履修上のポイント	基本教材2は国際的マネーフロー全般に関する現状分析だが、これに、基本教材1の枠組みを組み合わせ考察することを試みる。
レポート課題1	ユーロの今後（タイムスパン5年以内）を検討せよ。 留意点： ハーバード・ビジネス・スクールの作成したケースを分析してもらおう予定（ケース－英語－は早目に配付する）。ユーロ体制の維持を与件とする必要はない。政策論（欧州諸国はどうすべきか）に踏み込んで考えて欲しい。
レポート課題2	円の将来（タイムスパン10年以上）を展望せよ。 留意点： ユーロ危機分析の応用として、円の行方を考える。米ドル、中国元との関係で論じること。